



# 中谷宇吉郎 雪の科学館 通信

NAKAYA UKICHIRO  
MUSEUM OF  
SNOW AND ICE

号 外

2005 (平成 17) .8.20

発行 / 中谷宇吉郎 雪の科学館

〒922-0411 石川県加賀市潮津町イ106番地

TEL 0761-75-3323 FAX 0761-75-8088

URL ▶ <http://www.city.kaga.ishikawa.jp/yuki/>

E-mail ▶ [yuki-mus@blue.hokuriku.ne.jp](mailto:yuki-mus@blue.hokuriku.ne.jp)

## ラトビアで宇吉郎と雪氷を軸にした展覧会が開催されます

### 雪と氷との対話 — 芸術と科学における観察 / イマジネーション —

バルト3国の1つ、ラトビア共和国の首都リガにあるラトビア国立自然史博物館 (<http://www.dabasmuzejs.gov.lv/>) で、今年11月10日から12月30日まで、中谷宇吉郎と雪氷を軸にした芸術と科学の展覧会が開催されます。2003年秋にラトビアの博物館から雪の科学館に協力の呼びかけがあり、これに中谷芙二子さん(宇吉郎次女)らが積極的に応えて企画を提案し、準備されているものです。この展覧会は、ラトビア国立自然史博物館の開館160年の新装記念として行われ、「2005年日・EU市民交流年」事業の認定を受けています。日本側からは、展示協力の他、レクチャー、シンポジウム、雪氷実験のデモンストレーション、詩の朗読等に参加するため、有志が訪問する予定です。

このイベントの実行委員長ヴィクトール・クラヴチェンコ氏が、打合せのため来日し、6月29・30日には雪の科学館を訪れました。

この機会に両国の交流をすすめて、(バルト海・歌の国ラトビア) (次ページ参照) への旅をおすすめ致します。

#### 「雪と氷との対話展」の構成

- I 雪結晶の観察記録の変遷
- II 中谷宇吉郎による「観察」の方法
- III 芸術家からのメッセージ
- IV アイスコア・プロジェクト
- V 地球からのメッセージ/ワークショップ
- VI レクチャーとシンポジウム
- VII 関連イベント 詩の朗読など



- 〈後援〉 ラトビア共和国文化省、在ラトビア共和国日本大使館、ラトビア共和国環境省、国立極地研究所、北海道大学総合博物館、北海道大学低温科学研究所、加賀市・中谷宇吉郎雪の科学館
- 〈助成〉 欧州連合委員会、文部科学省、ラトビア共和国文化首都財団、国際交流基金、ラトビア環境保護基金、ブリティッシュカウンシル、ノルディック委員会(予定)
- 〈協賛〉 株式会社ニコン、日本ガイシ株式会社、日本ビクター株式会社
- 〈協力〉 ギャラリー・アイゲン・アート、ギャラリーサイド2
- 〈企画協力〉 株式会社プロセスアート

#### ラトビアで日本の「雪博士」の展示会を開く

「雪は天から送られた手紙である」。この言葉で知られる「雪博士」中谷宇吉郎にちなんで展示会を首都リガで年末に開く。実行委員長として打ち合わせのため来日した。

係は年々深まっているが、ラトビアと日本との経済関係

る約1千万円の費用も欧州連合(EU)が半額負担、3年

も資金集めに奔走している。

# ひと

Viktors  
ビクトール・  
Kravcenko  
クラヴチェンコさん (33)



教育科学省の公務員。ラトビア大で東洋美術や思想を学んだ。世界で初めて雪の結晶を人工的に作り出した中谷の実験を映像で見、雪の美しさに魅せられた。「雪と文化、芸術などを絡めた展示会を開きたい」と思い立った。

や文化の交流はまだ始まったばかり。展示会を開こうにも、つても資金もなかった。インターネットで、中谷博士の次女芙二子さんが東京で暮らし、石川県加賀市に「中谷宇吉郎雪の科学館」があることを知った。展示会にか

がかりで開催にこぎ着けた。「雪と氷は科学者だけでなく、哲学者や文学者にも大切なテーマ。雪や氷の研究の歴史は、自然と人間の観察の歴史です」

2005年7月1日朝日新聞

## 「支援する会」が募金を呼びかけ

今回のユニークな展覧会にロマンを感じながらも、さげがたい現実として資金面の厳しさがあります。そこで「支援する会」を立ち上げ、財政面での支援活動を行うことになりました。ご理解、ご協力をいただければ幸いです。

尚、ご寄付は〈個人〉1口1万円以上

〈法人〉1口5万円以上

ご協賛は20万円以上(カタログ・チラシに掲載)

とさせていただきます。

◇呼びかけ人 浅田 彰、樋口敬二、法安桂子、池内了、磯崎 新、ヴィクトール・クラヴチェンコ、バーバラ・ロンドン、松枝大治、大幸 甚、高橋睦郎、高野悦子、田沼武能、渡辺興亜

◇幹事役 中谷健太郎、神田健三、山崎敏晴

◇事務局 玉井祥子

◆ご連絡先: 「雪と氷との対話展を支援する会」

(株) プロセスアート内

Tel : 03-3470-2664 Fax : 03-3470-2259

E-mail : [snowice@processart.jp](mailto:snowice@processart.jp)

ラトヴィアという国は、言うなれば世界中のフォークソングのふるさとである。近代民謡研究の父として知られ、柳田國男の民俗学にも大きな影響を及ぼした十八世紀ドイツの思想家ヘルダーが初めて民謡と出会ったのは、ドイツ本国ではなくラトヴィアにおいてであった。東プロイセン生まれのヘルダーは、リガ大聖堂に付属する教会学校の教師として、1764年から69年までラトヴィアの首都リガに暮らした（大聖堂の隣にある広場は現在も「ヘルダー広場」と呼ばれている）。リガは当時、ロシア帝国の支配下にあったが、中世のハンザ同盟以来培われてきたドイツとのあいたの経済的・宗教的・文化的な強い結びつきは、なお健在であった。この地でヘルダーは、近代化が進む西ヨーロッパではすでに死に絶えてしまった、農民の自然で素朴な伝統的歌謡を耳にして、大いに感動する。そしてこの後、ドイツに戻ったヘルダーは、ゲルマン民族の古い歌謡の掘りおこしに力を入れ、『民謡集』（1788～89年）を刊行する。これが引き金となり、十九世紀にはヨーロッパの各国で民謡への関心が高まる。すなわち、リガ時代のヘルダーが民謡と出会ったことが、その後、全世界的に盛んになる民謡研究の出発点となったのである。

ヘルダーがリガで聴いた民謡は、ラトヴィア語で「ダイナ daina」（複数形の「ダイナス dainas」の方が一般的）と呼ばれる、伝統的民謡である。ダイナスはその大半が強弱リズムによる簡潔な四行詩であり、その内容は四季の変遷から農作業、天体の運動、家族の営み、人生の智慧といったものまできわめて幅広い。しかしそのいずれにも共通しているのは、名も無き民衆によって作られ、その都度アレンジされ、歌い継がれてきたという性格である。

ラトヴィア民謡の出版はドイツ人の手ですでに十九世紀初頭から行われてきたが、ラトヴィア人自身が愛国的な意識から自分たちの民謡を集め始めるのは1870年代以降である。なかでも重要なのが、現在100ラツツ紙幣の肖像となっているクリスジャニス男爵（1835-1923）の功績である。1894年から1915年にかけて彼が出版したダイナス集は、体系的なラトヴィア民謡集として最初のものであり（全八巻、収録曲はじつに20万曲以上！）、今日まで基礎的な資料となっている。そしてこれが出版された時代が、第一次世界大戦およびそれに続くラトヴィアのロシアからの独立（1918年）の時期とちょうど重なっていることにも注意したい。当時のラトヴィア人にとって、ダイナスへの関心は、愛国心の発露、または独自の文化的アイデンティティの追求に他ならなかったのである。

ラトヴィア人が民謡の伝統をナショナル・アイデンティティの象徴としてきたことは、「どのラトヴィア人も一つのダイナを持っている」という諺にもよく表れている。ラトヴィアの現大統領であるヴァイラ・ヴィチエ＝フレイベルガは、同時に民俗学者でもあり、彼女が自ら編纂

した多くの民謡集をわれわれは手に取ることができるが、これもいかにもラトヴィアらしいことだ。

そして「歌う国民」としてのラトヴィア人の本領が最大限に発揮されたのは、ソ連からの独立時ではなかっただろうか。1980年後半に組織されたラトヴィア人民戦線は、民衆の非暴力的抵抗に主眼をおいた。1989年8月には他のバルト諸国とも連携し、タリン（エストニア）からリガを通してヴィリニユス（リトアニア）までの600キロを「人の鎖」で結び、世界中のメディアの注目を集めた。1991年8月21日、ラトヴィアはソ連からの独立を宣言するが、これは完全な無血革命であった。この一連の政治的出来事は、ラトヴィアで「歌う革命」と呼ばれている。これは歌をいわば武器として、歌いながら結集した民衆による政治的意思表示の成果だったからだ。

ソ連時代に始まり今日まで続いている民謡祭は、ラトヴィアの国民的象徴であると同時に、広く世界に開かれた歌の祭典である。私が二年前の夏に訪れたときも民謡祭が行われていたが、そこで印象的だったのは、「国」ではなく「民族」単位で代表が出ていたことである。旧ソ連や北欧の少数民族が、それぞれの衣装を着て、歌いながら行進をしていた。ラトヴィアからもクルゼメ、ゼムガレといった地域がそれぞれ別個に参加していた。それらに混ざって「イタリア」が一つの民族として出ていた。日本からはアイヌが参加し、舞台上で力強く太鼓を叩き、舞い、喝采を受けていた。だが「日本」の代表はいなかった。私は遠くバルトの地で「日本」とは何かを改めて考えさせられたのであった。この民謡祭は、現在の「国家」システムとは別のかたちで、すべての少数民族がそれぞれの文化的アイデンティティを保持したまま共存できるビジョンを提示してはいないだろうか。その意味で、ラトヴィアは、今日でも世界のフォークソングのふるさとであり続けているのだ。



撮影：吉田 寛

吉田 寛（よしだ ひろし）

1973年生まれ。国立音楽大学・多摩美術大学講師、専攻は音楽美学。現在、音楽と近代ドイツのナショナル・アイデンティティに関する著作を執筆中。